

建築主：国立大学法人 東京大学

(計画コンセプト・建築設計ディレクション：大野秀敏+東京大学大野研究室)

設計：日本設計・大成建設設計共同企業体

施工：大成建設株式会社 千葉支店・株式会社関電工 千葉支店

所在地：柏市柏の葉5-1-5

環境に配慮した建築物

稀有なPFIで実現した環境建築の形

東京大学柏キャンパス新領域環境棟



方位毎に変えたルーバーと金属断熱サンドイッチパネルの織りなす外観

東大の真新しい柏キャンパスに出現したこの研究棟では、建築物の環境的な側面から様々なチャレンジが試みられている。独立行政法人化された国立大学の施設校舎としてPFIによる発注方式が導入され、そのプログラムづくりに大学ならではの工夫と努力が重ねられた。大学側の委員会は用途や空間プログラムはもとより、ほぼ基本設計レベルのエスキスを重ね、設計の大枠を綿密にスタディするとともに、その運用や維持管理に関する要件を詳細に設定し、それらをPFIの条件とした。応募グループに竣工後100年間にわたるLCCの試算を求めたことは、その信頼性はさておき事業の姿勢として象徴的である。

建築的には立体格子状の単純な主体構造にS字型の平面形状を与え、自然換気・自然採光の極大化を担保した。外見を特徴付ける外壁の随所に施された繊細な金属製外付けブラインドは単なる日射遮蔽だけではなく、太陽の角度に応じて微妙な反射光と陰影を生み、ローコストながら美しい立面を見せている。他にも様々な試みがあるが、空調範囲を

思い切って限定した結果生まれた内部ながら緩衝的な空間が各所にアクセントを与え、透明で明るい内部空間に変化を生み出している。優れた建築家、建築研究者集団が発注者側を構成することで実現した恵まれたケースである。

ただし、ローコスト化の結果随所に採用された外壁の既成断熱パネルや開口部のアルミサッシの接合部におけるヒートブリッジの恐れや、建設途上とはいえキャンパス全体の大味なマスタープランによる建物配置に対しては疑問を持つ審査員も多かった。これらへの答えは今後の熟成過程における事後評価の情報開示に期待したい。(岩村和夫)



頂部にベンチレーターを配した自然換気の要のアトリウム



金属断熱サンドイッチパネルはアルミサッシ固定。講堂上部は屋上緑化

(撮影/川澄建築写真事務所)